



● ヒノキ根株腐朽病とは

ヒノキ根株腐朽病とは、材積の最も大きい根元部分が腐朽する病害です（図1）。近年、岐阜県だけでなく他の県でも被害が確認されるようになってきました。

病原菌は木材腐朽菌類で（図2）、これまでに複数の種が明らかになっています。菌の樹体内への侵入経路は、枯死根や根の傷、地際の樹幹傷といわれています。

ヒノキは本被害に罹病しても枯死しませんが、被害を放置すると、樹体内で幹の軸方向や中心方向へ腐朽が進んだり、周囲の健全木に感染したりします。



図1 ヒノキ根株腐朽病の被害



図2 被害木から分離した木材腐朽菌



● 岐阜県での問題点

現在の岐阜県における被害の発生程度や被害地域、被害の侵入経路などは全く不明の状態です。効果的にかつ効率よく防除を行うには、被害対策を重点的に行う必要のある地域や、被害の特徴を把握する必要があります。

そこで、岐阜県内のヒノキ根株腐朽病の発生状況を調査しました。調査は間伐・皆伐から1年以内の62林分で行い、調査地が偏らないよう10kmメッシュあたり1~2林分選びました（2020年1月時点）。林分あたり100本の根株断面について、腐朽被害の有無を調べ、各林分の腐朽本数割合を算出しました。

● 岐阜県におけるヒノキ根株腐朽病の発生状況

調査の結果、62林分中60林分において被害が確認され、腐朽本数割合は0~85.4%、平均20.5%でした。図3に、地域別の平均腐朽本数割合を示しました。腐朽本数割合は東濃地域で約9%と最も低く、西濃・揖斐地域で30%を超えました。すべての地域で、腐朽被害の多くは地際の樹幹傷から侵入していました。侵入門戸となった傷のうち、特に被害の多かった揖斐地域で約半分、西濃地域で約4割が、シカによる剥皮害でした（図4）。他によくみられた菌の侵入門戸として、スギカミキリなどの虫害（図5）、クマによる樹皮剥ぎ（図6）がありました。

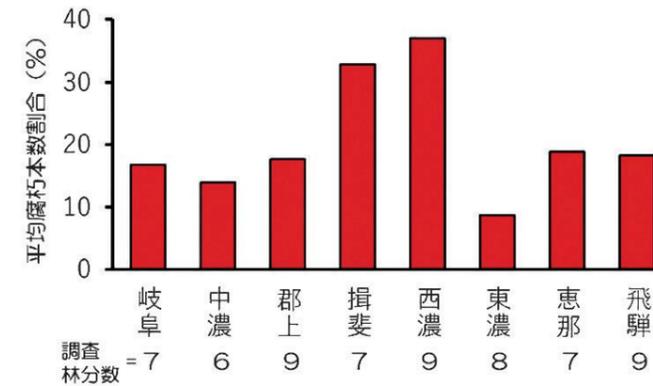


図3 地域別の平均腐朽本数割合 (%)
(可茂、下呂地域は未調査)



図4 シカの剥皮傷から侵入した腐朽被害

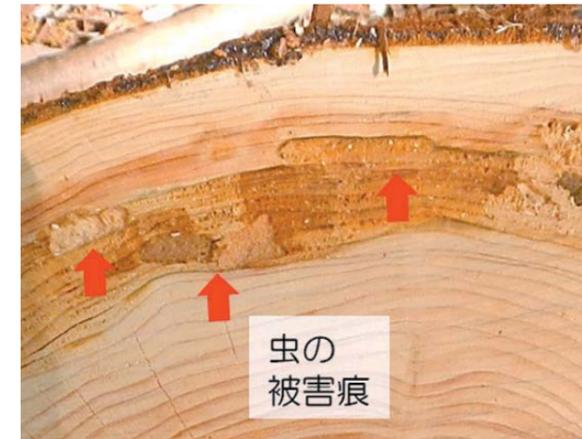


図5 虫害痕から侵入した腐朽被害



図6 クマの剥皮傷から侵入した腐朽被害

● 被害対策のためには

今回の結果から、県内ほぼ全域ですでにヒノキ根株腐朽病が発生していることがわかりました。また、地域によって腐朽菌の侵入経路に特徴があることがわかりました。新たな被害木を出さないためには、主要な侵入門戸となっている地際の樹幹傷をつけないための対策が重要であり、地域によって重点的に行う必要のある傷の防除対策が異なることが示唆されました。

さらに、腐朽を拡大させないためには、早期に被害木を発見して伐採・搬出することが重要です。現在、森林研究所では早期発見のために、被害の発生しやすい環境の解明、非破壊で被害を診断する技術の開発を行っています。